

脱がなくていい。俺が脱が
すから □ ファインダー越し
に全部見抜かれて、
ストロボの残像の中で
身体ごと暴かれました □

シャッター音が、心臓の音に重なる。

カシャ。カシャ。カシャ。

レンズの向こうに、黒い瞳がある。その瞳が私を——私だけを見ている。分かっているのに視線の行き先が掴めなくて、どこに手を置けばいいのかも分からなくて、唇を噛んだ。

「肩、上がってる。力抜いて」

「す、すみません……」

「謝んなくていい。——ちょっと髪下ろしていい？」

近づいてくる。黒のカットソーから覗く手首が、想像より太い。首にかけたカメラが揺れて、ストラップの黒革が鎖骨の上で滑った。

耳の後ろに指先が触れた。

——冷たい。

違う。私の肌が熱すぎるんだ。髪ゴムをほどく指先がうなじを掠めて、その一瞬だけ呼吸が止まる。ぱさり、と栗色の髪が肩に落ちた。

「——うん。いい」

独り言みたいな呟き。でもその声の低さが鼓膜の奥に残って消えない。久我さんはまたファインダーの向こうに戻って、シャッター音が再開する。

——落ち着け。ただの撮影だ。莉子に頼まれた、練習用のモデル。その莉子はドタキャンして、今この広いスタジオには二人きりで、窓からの光が白壁を柔らかく照らしていて、コーヒーの残り香がして、この人の声がやけに近く聞こえて——

「窓の外見て」

「え？」

「そう、横顔。——いい」

カシャ、カシャ。

「もうちょい顎引いて。……そう。自然でいい。笑わなくていいから」

笑わなくていい。その一言がなぜか胸に刺さった。いつも笑顔を作らなきゃいけない場面ばかりだったから。会社でも、友達の前でも。愛想笑いの筋肉ばかり発達して、素の顔がどんなだったかもう思い出せない。

「そう。今の顔」

カシャ。

「——綺麗だよ」

え。

一瞬、誰に向けて言ったのか分からなかった。このスタジオに二人しかいないことを、頭が受け付けない。

レンズの向こうから飛んできたその声は、世辞の温度じゃなかった。独り言みたいな——本音が零れたみたいな——。

顔が、熱い。耳まで赤くなっているのが自分で分かる。咄嗟に横を向いた。

——カシャ。

「今の、いい顔だった」

「え……っ」

「照れて横向いた顔。すごく良かった」

カメラの背面モニターをこちらに見せてくる。そこに映っていたのは――頬を紅く染めて、睫毛を伏せて、唇を微かに開いた女。

知らない。こんな顔をする自分を、知らない。

「……これ、私ですか」

「お前以外に誰がいるんだよ」

低い笑い声。胸の奥がきゅっと驚掴みにされて、呼吸の仕方を忘れる。

*

撮影は一度中断になった。

「次、衣装変えてみない？」

スタジオの隅に並ぶラックから、久我さんが白いシャツを一枚取って渡してくる。メンズのオーバーサイズ。洗いざらしのコットンの匂い。

「これ着て。下はスカートのままでいい」

「……着替え、どこで」

「カーテンの向こう」

薄いカーテン一枚を隔てて、ブラウスを脱ぐ。ボタンを外す指先が震えているのは寒さじゃない。さっきの「綺麗だよ」がまだ耳の中でぐるぐる回っていて、心拍がずっと元に戻らない。

シャツに袖を通す。大きい。肩が落ちる。素肌の上にコットン一枚、その薄さが怖い。ブラは着けたまま。でも布越しに空気が触れ

る心もとなさに、腕を抱いた。

——馬鹿みたい。練習モデルでしょ。仕事でしょ。お世辞でしょ。

でも、あの声は。

あの声だけは、嘘じゃなかった気がする。

カーテンを開けて戻ると、スタジオの光が変わっていた。ブラインドが下ろされ、ストロボのセッティングが組み直されている。さっきまでの爽やかな自然光じゃない。柔らかくて、少し熱を帯びた、夕暮れみたいな橙。

「窓の前の椅子に座って」

低い椅子に腰掛ける。シャツの裾が太腿の途中まで。素足が投げ出される。さっきとは空気が違う。温度が、二度くらい上がった気がした。

「首、右に傾けて。……そう。もうちょい」

言われるままに首を傾げる。シャツの襟元が開いて、鎖骨が覗いた。

「いい。そのまま」

カシャ、カシャ、カシャ——シャッターのテンポが上がっている。久我さんの呼吸が微かに変わったことに、気づいてしまった。

肩紐がずれた。ブラの肩紐が、シャツの肩口から白い肩の上にだらしなく落ちて——

シャッター音が止まった。

久我さんがファインダーから顔を上げる。レンズ越しじゃない、生の瞳と目が合った。

その目が。

——撮影者の目じゃなかった。

私の肩を、鎖骨を、シャツから覗く肌を。なぞるように見ている。視線に明確な熱があった。欲と呼ぶには丁寧すぎて、優しさと呼ぶには鋭すぎる、何か。

「——知ってた？ お前、自分がどういう身体してるか」

唐突。意味が分からない。分からないのに、背筋にぞくりと電流が走った。

「鎖骨から肩のライン。写真やってる人間なら全員撮りたいって思う造形だ。なのにお前、隠してる。勿体ないとかそういう話じゃなくて——知らないだろ。自分の身体が綺麗なこと」

心臓が喉元まで上がってくる。逃げたい。足が動かない。見られている。レンズ越しじゃなく、直接、全部。

怖い。のに——身体の奥が、じんわりと、熱い。

＊

咄嗟にシャツの襟元を掴んで閉じた。

「あ、の……すみません、肩紐が——」

久我さんは一度目を閉じて、ゆっくり息を吐いた。それからカメラを首から外して、テーブルに静かに置く。

「――もう少し、撮らせてくれないか」

声が変わっていた。さっきまでの飄々とした口調じゃない。低くて、静かで、切実な声。

「肩のラインだけでいい。シャツ、もう少し開けてほしい。……ただのポートレートじゃ勿体ない。お前の身体は――」

言いかけて、止まった。

「……ごめん。モデルにこんなこと言うのはルール違反だ。嫌なら――」

「嫌じゃ……ない、です」

自分の声に自分で驚いた。なぜそんなことを言ったのか。でも嘘じゃない。この人に見られることが、怖いのに嫌じゃない。

――もっと見てほしいと思った自分がいて、その自分に一番驚いている。

久我さんが近づいてくる。一步。二歩。立ったまま、椅子に座っている私を見下ろした。

「自分で脱げるか？」

低い声。

シャツのボタンに指をかける。震える。外せない。恥ずかしいんじゃない。この人の前で肌を晒すことの意味が重すぎて――指が動かない。

大きな手が、私の手に重なった。指先まで温度がある。じんわりと、骨に沁みる熱。

「――脱がなくもいい。俺が脱がすから」

その一言で、私の中の何かが折れた。

ボタンが一つずつ外される。上から順に。久我さんの指先が布を割るたびに、肌が空気に触れた。鎖骨。胸の谷間の始まり。ブラの上辺。――そこで止まる。

「怖いかな？」

首を振った。嘘。本当は怖い。でもそれ以上に、この人の指が次のボタンに進むのを待っている自分がいる。

最後のボタンが外れて、シャツが肩から滑り落ちた。上半身はブラだけ。久我さんの視線が私の肌の上を移動する。触れてもいないのに、視線が通った場所が熱い。

「――撮っていいかな」

頷く。声が出ない。

久我さんがカメラを手取る。至近距離。レンズが私の鎖骨を、肩を、腕を捉えた。カシャ、という音が、さっきまでとまるで違う響きに聞こえる。もっと近い。もっと親密な。

――撮られている。半分裸で。この人に。なのに逃げたいと思わない。思わない自分が一番怖い。

*

ストロボが焚かれた。

閃光。視界が白く焼ける。目が眩んで、何も見えない。

——その瞬間に、背中のホックに指が触れた。

「——っ」

「動くな。目、閉じてていい」

光の残像が瞼の裏で踊っている。その中で、ホックが外された。カチ、という小さな金属音。ストラップが肩から滑り落ちて、ブラが床に落ちる、かすかな布の音。

見えない。ストロボの残像で、まだ視界が戻らない。なのにこの人は見えている。私の胸を。素肌を。全部。

「綺麗だ」

また、その言葉。でも今度は独り言じゃない。明確に、私に向かって。私の裸の胸を見て。

涙が出そうになった。なぜか分からない。——嘘。分かってる。誰にもこんなふうに見られたことがなかったから。見せたこともなかったから。私の身体は地味で、特徴がなくて、誰の目にも留まらないはずで——

「お前、泣きそうな顔してる」

見抜かれた。

「……言われたことないんだろ。綺麗だって」

全部バレている。

「なんで分かるんですか」

「カメラマンだから。人を見るのが仕事だ。——でも今は、仕事で見ない」

手が触れた。指先が鎖骨の窪みをなぞる。軽い。あまりにも軽い接触。なのに身体がびくりと跳ねた。

「——ここ、こんなに反応するんだ」

自分でも知らなかった。鎖骨に触れられただけで、こんなに——。

指先が鎖骨から下へ降りていく。胸の膨らみの輪郭を、触れているのか触れていないのか分からないほどの軽さでなぞった。肌の上を滑る指の温度が高くて、その軌道だけが火傷みたいに熱い跡を残していく。

乳首の周りを、ゆっくり一周。

「っ……あ」

「ここ。自分で触ったことある？」

ない。自分の胸をこういう意味で触ったことなんて。

「ないだろうな。こんなに形がいいのに——お前、自分の身体に興味なかっただろ」

指先が乳首を掠めた。ほんの一瞬。なのに電流みたいな快感が背骨を駆け下りて腰の底に落ちて、膝ががくんと抜けた。

「や……っ♡」

声が出た。自分の声じゃないみたいな、甘い声。こんな声、出したことない。

「いい声。——もっと聞かせて」

久我さんが私の前に膝をつく。座っている私と視線が同じ高さになった。近い。吐息がかかる距離。瞳の中に、私の裸が映っている